

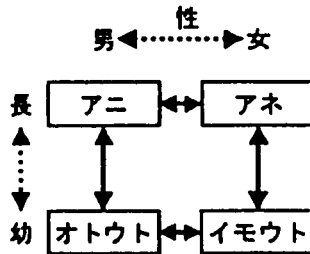
対義構造の性格

田中章夫

1. 単語間の意味の対立

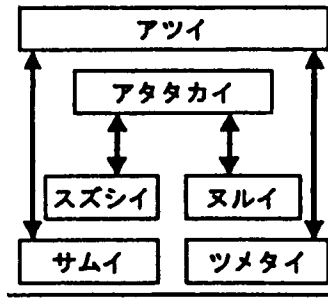
語と語の間には、たとえば「オット（夫）」と「ツマ（妻）」、「アニ（兄）」と「アネ（姉）」、「オトウト（弟）」と「イモウト（妹）」、あるいは「オヤ（親）」と「コ（子）」「アニ」と「オトウト」、「アネ」と「イモウト」のように、さまざまな、意味の上での対立が見られる。このうち、「オット／ツマ」「アニ／アネ」「オトウト／イモウト」は、性の面での対立であり、「オヤ／コ」「アニ／オトウト」「アネ／イモウト」は、世代・長幼の面での対立である。

このような、語と語の間の意味の対立、すなわち「対義関係」を描き出す対立軸は、「意味ベクトル（指向性）」などと呼ばれるが、いま、「アニ／アネ／オトウト／イモウト」の間の対義関係を図示すると、図1のようになる。ここに示すように、この4語は、性のベクトルと長幼のベクトルとによって結ばれてセットになっている語群である。



(図1)

また、いわゆる温度形容詞「アツイ／サムイ・ツメタイ」「アタタカイ／スズシイ・ヌルイ」について、対義関係を描くと、図2のようになる。「アツイ／サムイ」「アタタカイ／スズシイ」は、感覚の面での対立であり、「アツイ／ツメタイ」「アタタカイ／ヌルイ」は感触の面での対立である¹⁾。したがって、この6語は、温度状況をめぐる表現において、感覚のベクトルと感触のベクトルによって対義関係が構成される語群である。

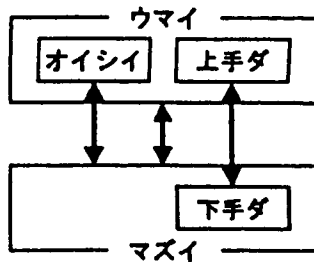


感覚 感触

(図2)

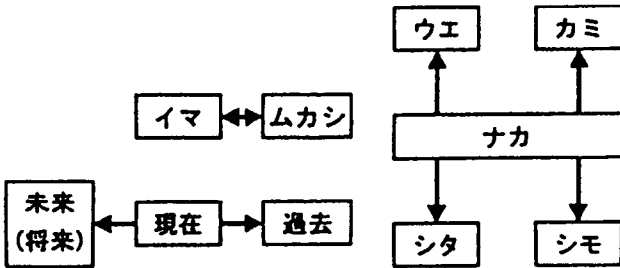
2. 対義構造の種々相

図1・図2に示すような、意味の対立関係、すなわち対義関係によって結ばれてセットになる語群を「対義語」というが、対義語の中には、図3の「ウマイ (オイシイ・上手ダ)」と「マズイ (下手ダ)」の対立のように、複雑なものもある。「ウマイ」は、「オイシイ」と「上手ダ」を内包する上位語として、「下手ダ」を内包する「マズイ」と対立する。さらに、「オイシイ」は「マズイ」と、「上手ダ」は「下手ダ」と、それぞれ対立して、図3に示す対義構造を形成する。



(図3)

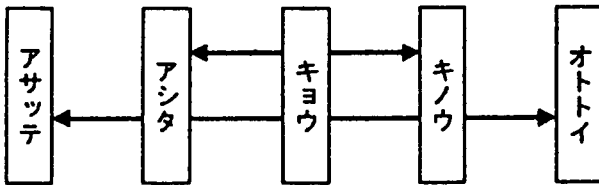
また、「今は昔」とか「昔を今になすよしもがな」といったように、古くから「イマ」と「ムカシ」は対立しているが、「現在」は「過去」とは対立しない。いうまでもなく「過去／現在／未来」の系列では、「現在」を基準にして「過去」には「未来」あるいは「将来」が対立する。図4に示すように「過去」と「未来(将来)」は、「現在」を中心にして伸びる意味ベクトルに対立するわけである。同様のものに「ナカ」を基準にして構成される「ウエ・カミ／ナカ／シタ・シモ」などがある (図5)。



(図4)

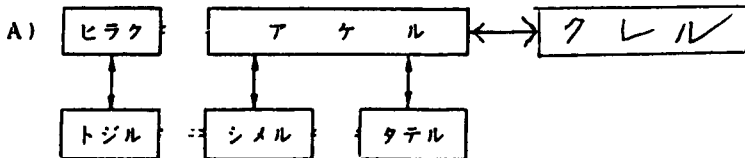
(図5)

この種の対義構造の中には、図6にあるような、「キョウ」を基準にして、「アシタ (アス) / キノウ」が対立し、さらに、その外側に「アサツテ / オトトイ」が対立するといったものも見られる。いずれも、対立軸に基点となる語が認められる対義構造である。



(図6)

対義語では、それを構成する単語の、意味・用法の広がりとともに、新たな語が加わってくるのが珍しくない。たとえば、「ヒラク・アケル」には、まず「シメル・トジル」が対立するが、「ドアのアケタテが乱暴だ」とか「人の口に戸はタテられぬ」といった用法から「ヒラク・アケル」対「タテル」の対立が加わり、さらに「タテル」対「タオス」の対立に広がる。一方、「アケル」には「夜がアケル」の「アケル」もある。この意味・用法からは、「アケル / クレル」の対立が生じてくる。その結果、図7に示すような対義構造が形成されることになる。



(図7)

ところで、関西のことばでは、「チラカス」に対立するのは、「カタツケル」で

はなく「ナオス」である。また、東日本各地には、「明後日の翌日」を「ヤノアサツテ（ヤナサツテ）」という地域が広く見られる。こうした地域のことばでは、「サキオトイ」に対立するのは、「シアサツテ」ではなく、「ヤノアサツテ」になる。

現在では「交番で道をキク」も「先生の注意をキク」も「キク」一つで間に合わせてしまうが、昔は、「情報を求める」のは「問フ」であり、「情報を受け取る」のが「聞ク」だった。少なくとも中世までは、「問フ」と「聞ク」は対立するものと認識していた。中国語でも「問」と「聽」は対立する概念であり、英語の「to ask」と「to hear・to listen」も同様である。しかし、スリランカのシンハリ語の場合は、日本語と同じように、古語・文語では対立があるが、口語では失われているという（図8参照）。

日本語		
	聞	問
古代語	キク	トフ
現代語	キク	

シンハリ語		
	聞	問
文語	sawan denəwa	ahanəwa
口語	ahanəwa	

(図8) 「キク (聞)」と「トフ (問)」

対義構造は、地域により、時代により、あるいは言語によって必ずしも一様ではない。

3. 対義語と反対語 (反義語)

さきに、図2の温度形容詞の説明で、「アツイ／アタタカイ／スズシイ／サムイ」の「感覚」の系列のベクトルと、「アツイ／アタタカイ／ヌルイ／ツメタイ」の「感触」の系列のベクトルのことを述べたが、「アツイ」と「サムイ」、「アタタカイ」と「スズシイ」は、「感覚」の意味ベクトルでの対立であり、「アツイ」と「ツメタイ」、「アタタカイ」と「ヌルイ」は、「感触」の意味ベクトルでの対立である。このように、意味ベクトルに対立してセットになる語は、「反対語」または「反義語」と呼ばれる。

はじめに述べた「兄弟姉妹」の意味の「アニ・アネ・オトウト・イモウト」の場合は、図1に示すように、「アニ」と「アネ」、「オトウト」と「イモウト」は、「性」のベクトルに対立し、「アニ」と「オトウト」、「アネ」と「イモウト」は、

「長幼」のベクトルに対立する、反対語である。したがって、「アニ」の反対語は、「性」の面では「アネ」になり、「長幼」の面では「オトウト」になる。

このように、ある語の反対語は、その語と対義関係を構成する、意味ベクトルの採り方によって決まるので、複数の反対語が認められることがすくなくない。

たとえば、「タカイ」の反対語は、「ヒクイ」の場合もあるし、「ヤスイ」の場合もある。これは、対義関係によって結ばれる「タカイ／ヒクイ・ヤスイ」の対義語のセットの中で、「タカイ／ヒクイ」は「上下の高低」の意味ベクトルに対立し、「タカイ／ヤスイ」は「値段の高低」の意味ベクトルに対立しているわけである。

「コドモ」は「親族」の面では「オヤ（チチ・ハハ）」と対立し、「長幼・世代」の面では「オトナ」と対立しているので、「コドモ対オヤ」「コドモ対オトナ」の2系列の反対語が成り立つということになる。

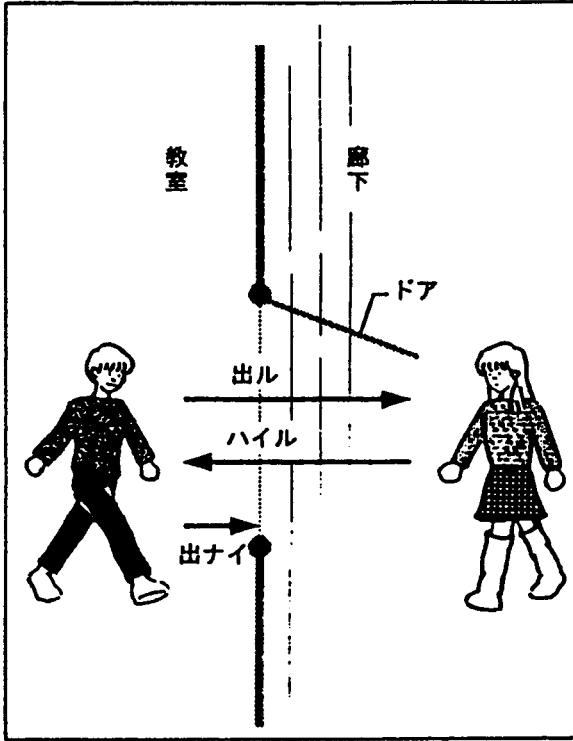
また、図3に示した「ウマイ」をめぐる対義語においては、「下手ダ」を内包する「マズイ」は、まず「ウマイ」と対立し、さらに「ウマイ」に内包されている「オイシイ」と対立して、「マズイ対ウマイ」と「マズイ対オイシイ」の2系列の反義関係を結んでいる。

反義関係においては、図6に示すように、「キノウ」の反対語は「アサツテ」ではなくて「アシタ」であり、「オトトイ」の反対語は「アシタ」ではなくて「アサツテ」になるというように、「キョウ」を基準にして、意味的に等距離にあるものが反対語になる。これも反義関係を考えるときの、重要な指標である。さきに図2で、温度形容詞の対義構造を図示したが、この図で、「感覚」の系列の「アツイ」の反対語は「スズシイ」ではなく、「サムイ」になり、「感触」の系列で、「ツメタイ」の反対語が「アタタカイ」ではなく、「アツイ」になるのも、「あつからず、さむからず（つめたからず）」といった、基準点のようなものが想定されて、そこからの意味の隔たり・距離によると考えられる。

4. 反対語と対極語（双極語）

子供は、よく「オイシイ」の反対は「オイシクナイ」だ、「広い部屋」の反対は「広クナイ部屋」だといった答えをする。

四、五年前、ある座談会で、中学校の先生が「中学生でも『出ル』の反対は『出ナイ』と答える生徒がいる」と話しておられた。その先生は、教室のドアの所に生徒を立たせて「教室から廊下に出ル／廊下から教室にハイル」行動を実際に取りらせて「出ル／ハイル」と「出ル／出ナイ」との違いをたたきこむという（図9）。ベテランの先生のすばらしいアイディアにいたく感心した思い出がある。

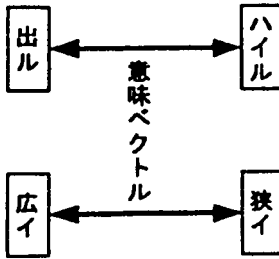


(図9)

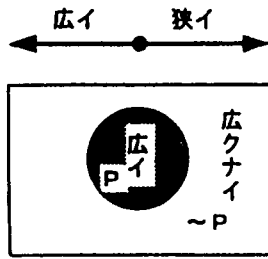
「出ル」に対する「ハイル」や「広い」に対する「狭い」も、一種の否定であり、図10に示すように、意味ベクトルでの対立に基づく「否定」で「ベクトルの否定」などといわれる。

一方「出ル」に対する「出ナイ」や「広い」に対する「狭くナイ」など、普通の否定は「限界的否定」といわれるもので、「出ル」なら「出ル」の、「広い」なら「広い」の意味領域の中にあるか、外にあるかを区別するものとされる(図11)。

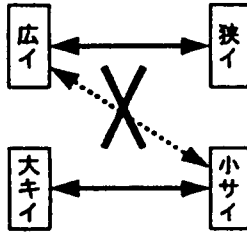
幼児の言語習得の課程で、限外的否定の方は「これはママ?」「ママじゃない」、「ネンネしよう」「ネム(眠)ない」といった形で、ごく自然に身についていく。しかし、ベクトルの否定のほうは、なかなか自然には身につかない。やはり言語教育を通じて、「広い部屋」の反対は「小サイ部屋」ではなくて「狭い部屋」、「小サイ部屋」の反対は「広い部屋」ではなくて「大キイ部屋」といった、意味ベクトルの正しいとらえ方を学んでいくことになる(図12)。



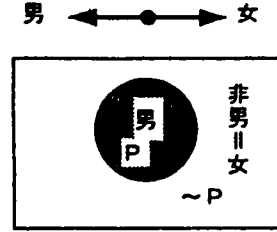
(図 10)



(図 11)



(図 12)



(図 13)

また、反対語の中には、「オモテ⇔ウラ」「オトコ⇔オンナ」「アル⇔ナイ」「死
ヌ⇔生キル」「浮ク⇔沈ム」「信ジル⇔疑ウ」「同ジ⇔違ウ」のように、一方を否
定すると、直ちに他方の意味に転化してしまうものがある。「オモテじゃない」
といえは、「ウラ」、「死んでない」といえは、「生きている」というわけである。
これらの語は、また、普通の反対語のように「やや広イ」とか「たいへん狭イ」
といった段階づけ（意味の連続性）を持たずに、意味ベクトルの「両端の極に対
立している」ことから「対極語（双極語）」と名づけられている²⁾。

こうした対極語では、一方の語の意味は、他方の否定の形で定義することがで
きる。「オトコ=オンナでない人」といった具合である（図 13）。『国語辞典』で
も、たとえば「信ジル」の項の説明は、「疑いなく、ほんとうだと思う」と「疑
ウ」の否定の形で定義されていることが多い。

対極語は、いわば反対語の中でも、もっとも反対語らしいセットだから、辞書
が示す反対語も、こうした対極語を中心に採り上げられている。

しかし考えてみると、対極語の場合は、「信ジル」の反対は「信ジないイコ
ル、疑ウ」、「オトコ」の反対は「オトコじゃないイコル、オンナ」となるわけ
だから、子どもたちのやる「オイシイの反対はオイシクナイだ」に一脈通じると
ころがある。それは、反対語の本質が「否定」にあるからであり、「オイシイの
反対はオイシクナイだ」も、あながち退けられないものをもっている。

5. 対比語（対照語）

必ずしも意味的な対立とはいえないが、社会生活のうえで、時に対比的にとらえられる、たとえば「水と油」「草と木」「先生と生徒」「戦争と平和」「アマとプロ」「国立・公立・私立」「本職／内職・副職」の類は、「対比語」とか「対照語」などと呼ばれる。対義語の周辺にあるもので、これらを取り上げていったら、実はキリがないが、言語生活の面では、無視しえないところもある。

こうした、対比語の類では、「山／川／海／陸」「青／赤／白／黒」のように、その時々で、対立の相手が変わってくることも、少なくない。

注

- 1) 渡辺実（1970（昭和45））「語彙教育の体系と方法」『講座・正しい日本語』明治書院
- 2) 泉井久之助（1956（昭和31））「否定表現の原理」『言語の研究』創元社